

三河アララギ



平成二十九年 2017年

十月号

第六十四卷 第十号

ニューヨーク日記(132) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

TORTILLA DE SETAS

Blue Shoe Diaries



そう、卵焼き。バルセロナの朝のお散歩に近くのマーケットに寄ったらもちろんタパスバーが開いていたのでちょっとコーヒーを。目の前に色んなタパスが見えるからやっぱりちょっと味見したいでしょ！ 適当にオーダーしたのがこの卵焼き。常温でとーってもシンプル。季節のマッシュルームが入っていてすごい美味しい！目が覚めて次は鰯の揚げたのを頼んでペロリ。おはようございます！

Morning stroll looking for a cup of coffee in Barcelona. We walked into a market in the neighborhood. A sort of a mini Boqueria. Of course there are tapas bars inside so we decided to get our coffee there. Then we started seeing delicious looking tapas being displayed. So we ordered this tortilla con setas. Looks pretty regular, right? and in Barcelona, I'm sure it's just regular. But it was so good! Super simple eggs with seasonal mushrooms. It's just that the egg tastes like eggs and the mushrooms! so aromatic and woody. It's even eaten at room temperature. This totally woke us up and our taste buds so we proceeded to order some fried sardines. mmm! Good Morning indeed!

目次

第六十四卷第十号(通巻七六六号)

表紙・数珠玉	今泉 由利 (1)	牧原 規恵 (26)	今泉 由利 (35)
ニューヨーク日記(132)	Blue Stone (2)	稲吉 友江 (26)	柳田 皓一 (35)
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	鈴木美耶子 (26)	山元 正規 (35)
歌集「かぜくさ」	大須賀寿恵 (5)	吉見 幸子 (26)	松本 周二 (35)
歌集「草々」	今泉 米子 (6)	牧原 正枝 (26)	植村 公女 (36)
歌集「はゝきくち」II	河原 静誠 (7)	石田 文子 (27)	今泉 如雲 (36)
むらさきの径	岡本八千代 (8)	森 厚子 (27)	「二茶名句集」
鞠子姉様	今泉 由利 (9)	山崎 俊子 (27)	かさね吟行会
つむじ風	弓谷 久子 (10)	三田美奈子 (27)	『酔いの徒然』(66)
家の宝	内藤 志げ (11)	水野 絹子 (27)	本からのあれこれ(23)
私のふる里	林 伊佐子 (12)	現代学生百人一首	ある自然科学者の手記(65)
四世代	安藤 和代 (13)	東洋大学	
西瓜	清澤 範子 (14)	田代 麻華 (28)	絹の話(83)
ひと夏	鈴木 孝雄 (15)	宮本 春奈 (28)	短歌に詠まれた茂吉 七十三回
マンガ	伊藤 忠男 (16)	長谷部巧馬 (28)	楽しい時間(59)
空蟬	森岡 陽子 (17)	川波 美咲 (29)	漢詩研修(12)
深海	阿部 淑子 (18)	小宮 由羽 (29)	植物の力(2)
空高く	足立 晴代 (19)	稲野辺絢香 (29)	「氷魚」のことから(201)
花を手向ける	白井 信昭 (20)	関 仁実 (29)	岡本八千代 (55)
盆行事	杉浦恵美子 (21)	津之地直一 (30)	『歴代天皇御製歌』(八十二)
エアメール	山口千恵子 (22)	高橋 育郎 (32)	『貫名海屋資料館』(56)
草ぐさとの共生	夏目 勝弘 (23)	山迫 京子 (34)	編集室だより(二〇一七年八月)
歌集「夢のつづき」	水上 信子 (24)	森岡 陽子 (34)	三河アララギ (58)
贈呈誌	夏目 勝弘 (25)	田中 清秀 (34)	野菜の花(16)
『ことよせ』		重野 善恵 (34)	鈴木 孝雄 (59)
いーはとぶ			お知らせ・「三河アララギ」について (60)

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

みのむしも碧くかがやくビニールを短かく着つつぶらさがるなり
ビニールの青き蓑きてみのむしのさがれる下を頭さげゆく

木の下に這ふ伽羅木の若き芽の萌えみえながら昏れはててゆく

アンデスの毛ものの皮を尻に敷きてわが書きつづく用なきものを

自然交配くりかへしつつわが庭の花は十いろのやぐるまの花

漂ひてあるひは吹かれ堆まれきて雨にかぐろし関東ローム層

上長山の山の笹ゆり十日あまりわれのめぐりに匂ひてゐたり

鳥の来む竹を植ゑて待つ十五年やうやく千羽のねぐらの塹となりぬ

苦しみてゆきたる旅に見しものは公孫樹の太木わが家にもある

初句おきてこころただちにひびきあふおのづからなる結句いで来よ

歌集「かぜくさ」

大須賀寿恵

どの家も昼の灯ともりゐて寒に入る日の雨降り続く

原因のなき不安感持ち続け夕べ炬燵に吾が子と寄り合ふ

麦の穂のゆるがぬ青き夕べにて鳥ら相呼ぶ裏庭に立つ

うづ高く渚によれる貝殻はみなひといろのとき色にして

石につき石に乾ける青海苔の青てり輝くを採ることもせず

日直に出でゆくといふ吾が子の声うつらに聞きてまた眠りたる

挿木せし枝垂柳のなびきつつ吾がある二階の窓撫づるなり

敷石の破れし隙より生ひて立ち一本のけし実を結びをり

娘の見合済みたる部屋にいつまでもメロンの匂ひ漂ひてゐる

スカート丈つめて穿くなり年々に背丈の縮む齡となりぬ

歌集「草々」

今 泉 米 子

金線草は紅もピンクも白も咲きていよいよ狭しわが庭のみち
みずひきそう

裏庭へ夕べを出でて子供らが拾ひのこせし胡桃三個を

高槻の黄葉の木下まだ濡れずいのちいひつつ歩みゆきたり

ひとときに庭のダチュラの花明り夕べの時雨暖かにして

わが祖にゆかりと心はづみ来てみ社は深き常磐木のなか
おや

天神山を下りて仰ぐ舞ひたちし鴉は棚田の空暗きまで

夜となりし厨の外より声かけて設楽の山の自然薯届く
しだら

樵の木の浴槽をまた喜べりブエノスのわれの幼子ふたり
さわら

青枯の蔓羊歯めぐらせ丹椿を水に浮かばす幼のあそび

いそがしき母に徒ひ帰りたり庭に丹椿拾ひてゐしが

歌集「はゝきくさ」II

河原静誠

寒行に開經の偈を声高く誦し行くわれに犬の吠えたつ

節分の祈禱を了へし衣にて豆まく吾れを子等のかこめる

只独り生ひたちたりと思ふわれ父母恩重經をくりかえし読む

佛門に入りしよろこび語りつつ年忌の非時に刺身をわが食ふ

本守の次郎柿一つわが採りて父の忌の今朝遣影に供ふ

独居のわが本箱に今日買ひし捨子物語り一部を加ふ

元旦の静かな陽ざし背にうけて年回表を独り記せる

一塊の路傍の石の光れるを吾がてのひらに拾ひあげたり

寒行を吾が怠りて日だまりに盲しひし伯母と一日語らふ

今日もなほ癒らぬ風邪に声からし寒行の經を誦しに出でゆく

むらさきの径

蒲郡 岡本八千代

やうやうに書き上げしわが「氷魚」の稿百一回目のうれしかりけり
ノボタンの花卉散り敷く庭の径どうしても踏みて行かねばならず
ほんのりと赤味帯びたる紫のノボタンの花片そつと踏みたり

先生の「ノボタンの窓」の歌集の題浮かびつつ歩むわがノボタンの径
夕暮れとなりたるけふの庭の径ノボタンの花のむらさき失せつつ
わが庵にひとりこもりて本を読むつひに木屑録もしまはむとして
赤や青のポストイットもそのままにしまひておかむ「漱石の夏休み」
老いつつある一日一日の過ぎにつつ自生えの木槿の花咲きつづく

台所を化学室とふに決めてよりけふも一汁一菜の献立
ムクゲ咲く細き梢梢ゆれてをりすぎゆく夏の風の吹く中

鞠子姉様

東京 今泉 由利

洗面の鏡に鞠子姉の顔今朝は重なる私の顔と

小さくて赤き琴爪つけくださりき鞠子姉より「さくらさくら」

三姉妹睦みし時の過ぎ去りぬひとりぼっちをひとり果敢ない

父と母と瑠璃姉とをよろしくね鞠子姉を今日は弔ふ

画かむよ釣舟草の群生をマルハナバチは先にきてゐる

どんぐりは古墳時代もどんぐりと呼ばれをりしかどんぐり実る

群なしてみな同じしてねこじやし今吹く風に降りだす雨に

快適に高速道を走りゆく自動運転している車よ

太陽はしばし重なる昼月にサウスキャロライナよりの映像

いながらにNASAの映像届きくるわが左手のスマートフォンへ

つむじ風

豊川 弓谷 久子

数秒間異様な空気に包まれぬ竜巻なりしとあとにて知りぬ

台風の置土産となりしつむじ風我が始めての体験なりき

少難にて済みしをせめて感謝せむ落ちて割れゐる瓦数枚

白菊の花束もちて長泉寺山門くぐりぬ家族揃ひて

さまざまの花咲く広き境内に人行き交ひぬ今日よりお盆

関が原をテレビに見てをり笹尾山陣営跡を思ひ出しつつ

合戦の日を偲びつつ笹尾山の夏草の中に佇ずみたりき

浴衣解きサンドレス二枚縫ひ上ぐる子と子の友とのペアルック

名産の桃の入りしロールケーキはやばや届きぬ我が誕生日にと

油蟬の声が何時しか法師蟬の声と変りをり秋の気配か

家の宝

豊川 内藤 志げ

わが歩みに低き水より翔び立ちぬ羽根の模様の格も美しくし

赤石の峰の方より湧き出づる真白に高きが輝きをます

朝から晴れて澄みたり三本の盆の掛け軸今日は納めむ^{あした}

舅の忌明までにと煤^{すす}ぼけし観音様に十三佛十六羅漢の表具なしき

わが家の宝となさむ三本の掛もしつかり卷けずまず納めたり

いつの間か芥の捨て場に糸瓜の見ゆ竹さしおかむ踏まれぬ様に

竹に木に終りながら高くまで糸瓜の花は風に揺れをり

朝の雨畑の畠の土を黒くなし風にゆらゆら霧となり見ゆ

わが車夜べの嵐の散らしたる竹の緑に包まれるごと

朝の坂太き朽ち竹横たわるくぐるに低くし跨ぐに高し

私のふる里

岡崎 林伊佐子

雨戸閉ざし町に都会に移転してわがふる里は廃屋の集落

舗装せぬ昔の街道のこりゐて夫の草刈る石くれの道

帰省して夫と休みし縁側に鬼やんまきてわれを迎へる

林道の山坂ひとり登り行く四季の野花は今も咲きつぐ

天道虫のこどもが夜の炬燵這うペンを持ちつつ眼まなこを凝らす

「寒狭川かんさがわ」の特集号に評価する恩師の歌評は心はげます

種蒔きの季節となりて朝な夕を散水に行く九月は多し

鬼灯の袋も蚊張の如く透く夕づく畑に赤き色顕つを

どくだみを軒場に吊して乾燥する朝あさに飲むほろ苦き味を

突発の難聴の世をのりこえて三世帯同居の幸せおもふ

四世代

豊川 安藤 和代

蟬時雨雀の声よ朝顔は七ツも咲きて今日が始まる

夫が呼び鉢花がよび犬がよぶ忙しいです私のひと日

孫からのメールに嬉し泣きしてる夫の背中がとても小さい

四世代九人で暮らした日もあるに夫と二人の広き食卓

台風が下宿の孫の方へ向く大事なかと手を合せおり

叱られた父の顔ゆれほめられた母の顔ゆるる迎え火の門

亡き嫁のつるしおきたる風鈴が夜半の私に語りかけくる

吾泣けば吾が笑えば風鈴も心同じき音色を放つ

休日も部活指導と日焼け顔さらに光らせ出勤の孫

仕事にも馴れて生徒はかわいいと孫の笑顔のそのさわやかさ

西瓜

春日井 清澤 範子

わが夫は狭窄症にてしびれるも腰かばひつつ西瓜を植える

日照時間少なき夏も楽しみに西瓜の世話をする夫に感謝

長雨の日は続くも雨間見て西瓜の世話を吾も手伝ふ

色形確かめながら西瓜をば夫と収穫残暑の一日

受粉して三十日目なり胸ときめかし大玉西瓜をパチンと切りぬ

晴間見て菜園の西瓜手に重し糖度良ろしく食後のフルーツ

陽当り良くまた雨にも合ひて西瓜取る家族三人美味しくいただく

冷蔵庫に丸ごと入れて冷やしたり種など言ひて食べてしまひぬ

乾きたる菜園に水かけるなり茗荷五ツ六ツ花咲きてゐる

押ボタン押して神社も久し振り蟬の声を聞きつつ祈る

ひと夏

沼津 鈴木孝雄

タチアオイ花が先まで到達すあとは立ち枯れ種残すのみ

台風は四国の南をうろうろと沼津の北には雲間に富士山

台風去り急ぎ畑に無事を見に里芋の葉裏クマゼミ一匹

室内を飛ぶ茶の甲虫急に増え調べてみるとなんと死番虫

カモミール立秋なのに残り花あきることなき種の保存力

刈り取れど刈り取れどまた芽を見せるドクダミの根はどこに潜むか

オクラの葉小さくなったかと追肥する黄色い花に微笑み返す

曇り空海の家は店じまい消化不良のひと夏も往く

浜風がほおに涼しい散歩道ナツアカネ逃げず道案内す

マンガ

大阪 伊藤 忠 男

マンガだとされどマンガか夢は夢不思議や不思議現実を呼ぶ

椎名町歩き疲れて腰おろす左にアトム右におそ松

足痛み身体疲れて息ぎれて高鳴る胸に心軽やか

石ノ森藤子不二雄に赤塚も手塚に憧れ住みたり四畳半

わが国かの国あの国ならず地球ファーストあるがほしけり

昨日雨今日は猛暑明日は電次は何なのため息の日々

予測した豪雨なりとて防ぐ術何も無きとは何をか云わん

ミツバチの羽根をもぎ取る雨力は土砂を流すや橋も流すや

間に合うか地球滅びるその前に現われるかなスーパーマンは

あれもこれ嘘であればと願う日々思い及ばぬことばかりなり

空 蝉

東京 森 岡 陽 子

炎暑日にトマトジュースの緋の色は渴いた喉も心も潤う

炎天の週末集い暑氣払い乾杯続く赤坂の夜

土用なる鰻を食ぶることとする一口ごとに気分だけ元気

涼風は硯塚抜け筆塚へ哲学堂はみどりに囲まる

哲理門簾^{れん}に物質天狗像並ぶ精神幽霊^{れん}像有る

車窓より群がり咲くは百日紅続く街路樹紅色白色

梅雨合間静まり返る寺の庭秋待つもみぢの緑あざやか

実万両まだまだ小粒青あおし一粒ふっくら赤い実見つけ

根元にはころり空蝉又ころり森はカナカナつくつく蝉時雨

駅前に櫓組まれて盆踊り揃いの浴衣おかみ群像

深海

横浜 阿部 淑子

海の底世界最深撮影で泳ぐ魚に興奮の眼まなざし

巨大なる積乱雲の襲い来て落雷激しく火災いや増す

車内より「ママも座って」と幼児の声伝わりて清しき思い

猛毒の「ヒアリ」包囲に対策費一・五倍の八億円に

猛暑なか浅草見物人力車「いい汗かけて」と車夫の笑顔よ

空高く

東京 足立 晴代

陽ざしうけ花の笑顔にやすらぎを覺ゆる日々の幸を

雨上りぬかるみの道続きゆきはてしなくとはこの事ならむ

そよぐ風紅葉葉ゆらし長月のおとづれありて風情覺ゆる

空高く雲流れ行き澄む心四季ある日本の誇りもありて

日々過す集いの楽しさ友人と交す言の葉微笑ありて

花を手向ける

豊川 白井 信昭

作業ズボン縫い目見つけ沁沁しみしみと亡き義母思う今日の幸せ

社近く空き家ひとつ残りゐて静もる庭に歲月流る

陰ふかむ青葉の桜若櫃わかがやの夏によりても飽かぬ社かな

根もあらわ道の傾斜なだりに傾けるひとつ山桜見守り行かむ

笹百合の俯うつむき加減に薄。ピンク細き項にわが嫁を見る

牛蛙の地をはうような低き音夕闇せまるヒメハルロード

生け垣に面影を重ね逝きし人偲ぶが如く梅雨の雨降る

思いつつ経にける年のかいやなきただあらましの夕ぐれの空

築かれて四一〇年彦根城琵琶湖近きか小さく正面に

園のなか嫁の在所の墓前にて家族四人花を手向ける

盆行事

蒲郡 杉浦恵美子

どの部屋に居れど漫ろに落着かぬ篠突く雨の台風通過

台風は独り暮しが意識さる友に電話もこの雨の音

右のもの左にしても淋しさは埋まらないけど遺品の整理

磨り硝子守宮の影が対角線番なるべし斯く思ひたし

ケータイの操作ひとつが謎に満つハイテク時代に暮すと云うは

四ヶ月入院したる我の許母は通ひぬ往復四時間

猛省をすれど甲斐なし応へなし亡き人思へどこの頼りなさ

来る当てのない盆の客待つよりはひとり旅せむ他郷の盆に

ああ今宵潮来は斯くもみんなして御霊迎ふるゆかしき習ひ

盆行事日本は何処もやさしくもうら淋しくも死者を迎ふる

エアメール

豊川 山口千恵子

佇める青田の中の白鷺は台風余波の風に吹かるる

暑き日の午後に届きぬ寒き日々のオーストラリアよりエアメール一通

高校にて授業してゐるたよりありメルボルンから遠きウオドンガの街に
持ちてゐる意見はきちんとと言える子ら感心してゐるモモ子のたより

授業する生徒は皆素朴なりと一ヶ月間の日本語教師

夏の日に梅漬けの紫蘇干してをり三日たちたり乾きてきたり

播り鉢にすりてゆかり粉作りゐる紫蘇の香りの漂ふ中に

図書館に「三河アララギ」ありましたおばあちゃんの歌探しよみました

昼過ぎに「三河アララギ」届きました頁繰りゐるわが歌よまむと

ぼうふらの湧きゐる甕の水を流す夏の日に乾ける庭土の上

草ぐさとの共生

豊川 夏目勝弘

宅地にと変更されし草の畑の除草を頼まれ五月の夏日

宅地にと成りし畑の除草するスズメノテッポウ我を撃つなし

そこここに花を付けゐるニワセキシヨウ今回のみは除草剂かけず

ツユクサの茂り茂げれる所には少し濃いめの除草剂とす

除草剂に枯れしを待ちて次つぎに次の草ぐさが生えてくるなり

母屋と物置小屋の空間に鋭く光る明けの三ヶ月

除草剂を撒くを止めし己が庭電動草刈機を買ふと決める

門口にセンダンソウの芽生えの多し我が仕事着に付きてきしもの

朝起きて夜を眠るネムノキも習慣病は人間のみぞ

北斎の魔除け獅子の図コピーをし常に座る正面に貼る

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

幸せを小さくまとめ穏やかに生き来し姉の顔の白さよ

限りなく蘇りくる思い出はセピア色せる姉のアルバム

常の日は宗教心なきわれなれど愛別離苦のうちに正座す

一本の煙草がもたらす幸せを幸せなりと疑いもせず

収穫を終えて人なき里山に柿の実赤く空を彩る

寺庭の石路の黄のさりげなく季節を映す風情に和む

穂を刈られ莖ばかりなる枯れすすき仙石原に野焼きの近し

ふるさとの名を冠したる列車着く札幌駅の喧騒の中

そばの花麦の秋色田の緑七月の空大地果てなし

青春の山あり湖あり遥かなりかすかに甘く過去よみがえる

贈呈誌

夏目勝弘

青森アララギ（第四百二号・木浪みつゑ）

○日の出づる一瞬の間のキャベツ畑無数の露の玉のきらめき

秋楡（4月号・春日井英子）

○北風を背にうけながら故郷へ眠ったままの草木ふみしめ

○庭の木々ゆらりとせぬ日の出前今日がくるとは思えぬものを（6月号・杉山千里）

柊（五月号・竹内眞子）

○雪かきのスコップ持つ手に容赦なく降りくる空をすべなく仰ぐ

○新緑のまだらに広がる前山のかなたに望む雪山眩し（七月号・神田智美）

鹿児島アララギ（3月号・山本和男）

○過ぎし日を語るを互ひに楽しみて雲間を過ぎる日のひかり待つ

○おだやかな日差しにあたる柿の木に雀がいくつ静かに止まる（4月号・増田教子）

○長雨のあがる兆しか夕風にアカメガシワのそよぎ始めぬ（5月号・堀之口ふさえ）

○雨強く部屋に籠りて居るわれに一匹の蠅まっはり止まず（6月号・中山タマエ）

冬雷（4月号・石本啓子）

○千里浜の渚を走りゆくバスより陽の暮れかかる地平線見ゆ

○公園のシンボル柳やわらかく芽吹きはじめて風に揺れおり（5月号・林美智子）

○退院し夫の日課は歩くこと明日の桜はきつと二分咲き（6月号・山田和子）

○代掻きの進むかたへの用水路流れゆたかに泡立ちてをり（7月号・関口正子）

『いっよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

盆近し色付き増せるわが鬼灯枯れずにあてと日々思ひつつ

炎天の夏の暑さに耐へきれずわれのスイカはそこに爆ぜて

牧原規恵

髪染めて眉引きファンデ薄くぬり卒寿の母の女おみないとほし

母誘ひわれと姉妹とランチせば「女子会ですね」とウエイター微笑み

稲吉友江

冷泉家の乞巧きつこうてんの幕開く赤き灯火美しきかな

カステラをお福分けとて下されしあなたのお福はほんのり甘く

鈴木美耶子

再びの銀座ブラブラ昼下がり弥生さんの水玉シックスの中

乞巧きつこうにわが想ひ込め短冊に今年も記す小暑の今宵

吉見幸子

名古屋にて「乞巧きつこう」は催さる願ひ密かに始まりを待つ

するすると白布は敷かれて天の川和歌の行き交ふ「流れの座」となる

牧原正枝

梅雨の中一人の部屋の片隅に未完成なわが油絵飾る

警報器も鳴り続きある災害の映像に見る老人背負いて

屋根つきの庭のプールに幼らと男三人無邪気にあふれて

ただ稀に立ち寄る息子の家なれど高原のヴィラと吾は思はむ

梅雨明けの風は大きくカーテンをゆらし入りくるわたしの部屋に

英国屋の熱き紅茶をひとり飲む蟬鳴く声の間近に聞こゆ

照りつづくけふの暑さに取り止めぬ四万六千日しまんろくせんにちの観音詣で

寄り添ひて茶房に來りし老い二人小さき花束もちてゐませり

梅雨晴れて祈りの像の指し示す爆心地に満つ青葉のざわめき

日本人故に訪はむと言ふ我にそれ故行かずと夫の応ふる

石田 文子

森 厚子

山崎 俊子

三田 美奈子

水野 絹子

現代学生百人一首

東洋大学

本かりて「どうかかな？」ときく君の文字僕は好きだとはさんでかえす

西武学園文理高等学校一年（埼玉県）

田代 麻華 たま はな

窓際で君と久々語りあう上手に巻けないペロンチーノ

西武学園文理高等学校一年（埼玉県）

宮本 春奈 みやもと はる な

今は亡き被爆者の声聞きつつも結局僕らは何をしたのか

芝浦工業大学柏中学校二年（千葉県）

鈴木 理々華 すずき りり か

目が合った小さくなった消しゴムと言われているよう「まだやれるだろ」と

芝浦工業大学柏中学校三年（千葉県）

長谷部 巧馬 たけべ たく ま

目がうつろ磁石みたいに眠たくてSが机でNがおでこだ

麗澤中学校一年（千葉県）

川波美咲みさき

ふと思う僕の居場所どこだろうその考えは友達が消す

東京学館船橋高等学校一年（千葉県）

小宮由羽ゆう

もうダメと一度勝負をあきらめた私一人が足手まといだ

西武千葉高等学校二年（千葉県）

稲野辺絢香いなのべあやか

貴方の眼ラムネに映る夏の青カメラかざせば届く気がした

西武千葉高等学校二年（千葉県）

関仁実ひとみ

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

ささなみの志賀の大わだよどむとも昔の人にまたも逢はめやも

左散難弥乃 志我能大和太 与杼六友 昔人ニ 亦母相目八毛(①三一、柿本人麿)

(口訳) ささなみの滋賀の大わだは、いくら人待ち顔に淀んでいたつて、もう再び昔ここに遊んだ大宮人たちには逢えないのだ。

前歌に続く返歌。「淀むとも」の「とも」は仮定であるが、その仮定は「今淀んでいないけれど、たとえ淀むとも」の意ではなく、今実際に淀んでいる景を見ながら「そんなに淀んでいても」の意である。結句の「逢はめやも」の「めや」は「む」の已然形＋やの形で、その「や」は反語の助詞、「も」は詠歎の助詞。前歌と同様擬人法をとっているが、その声調は重厚で人麿作としては初期のものであるが、既にかくの如く一流である。茂吉はこの力量は人麿の作歌の真率的な態度に本づくものだと言っている。

あみの浦に船乗りすらむをとめらが玉裳の裾に潮満つらむか

嗚呼見乃浦爾 船乗為良武 憾嬌等之 珠裳乃須十二 四宝三都良武香

(①四〇、柿本人麿)

(口訳) あみの浦で、船に乗つて遊んでいるであろうおとめの、美しい裳の裾にはそれをぬらすように今あたり潮が満ちているであろうか。

持統天皇がその六年三月に伊勢に行幸遊ばされた時、人麿が京にあつて詠んだ歌。第一句は原文「嗚呼見乃浦」とあるが、この歌を古歌として誦詠した卷十五には「安胡乃宇良」(三六一〇)とあり、又左注の「阿湖行宮」にもひかれ、ここも「見」は「見」の誤として「アゴノウラ」だとし、それは志摩国の国府のあつた地、国府、甲賀のあたりと推定しているのが通説である。然し、原文及び三六一〇の左注の「安美能宇良」に従えば、「アミノウラ」で、注釈によれば今日現に鳥羽湾の西に突出した小浜の南部を土地の漁夫は「アミの浜」と呼んで居り、ここと答志島・神島・伊良湖岬は一直線をなしても居り、この地を考えるのが穩当であるとして居られる。歌は行幸地のさまをはるか遠く想像して作つた歌だが、「珠裳の裾に」と具象的現実に表現したあたり、やはり浮薄な観念歌とは違つた生々とした力が出ている。「らむ」が二つも使われていることは歌に躍動的声調をもたらし、女官たちが朗らかに楽しそうに遊ぶ美しい写象と共に、この歌を明るい気持よい歌にしている。

童謡 「ういーの ういの」

高橋 育郎 作詞

いい風吹いてる 上野です
ハートがふくらむ 上野です

森をたずねて 坂道を

登ればひろがる 季節のかおが

頬をそめてる 上野です

ういーの ういの あたらしい

ういーの ういの なつかしい

遠いあの日が よみがえる

下町ふれあい 散歩道

人情風情 すみずみに

いきいき生きてる あかるい上野

ほりおこしたい 上野です

ういーの ういの あたらしい

ういーの ういの なつかしい

はじめての人にも あたたかい
かよいなれた 人たちも

お祭り気分の にぎやかさ

この街ときめき ライブタウン

大きな夢が あふれてる

うーの ういの あたらしい

うーの ういの なつかしい

ふるさとのおもい つのらせて

旅立つ人を 送りだす

都にあこがれ 来る人を

やさしく迎える 上野駅

むかしもいまも 変わらない

うーの ういの あたらしい

うーの ういの なつかしい

平成2年「うーの ういの」キャンペーン

『俳句』

稲妻や沖のタンカー照らしけり

山迫京子

終戦日テレビに合はせ黙祷す

哲理門くぐり行く先花芙蓉

森岡陽子

盆僧の背中に偲ぶうからどち

紙垂に秋の色あり神やしろ

田中清秀

千手観音色なき風の吹き抜けり

へくそ葛醜名なれども花可憐

重野善恵

稲妻に友の面差し美しき

太陽にしばし重なる秋の月

今泉由利

群れなしてみな同じしてねこじゃらし

とんぼうの群れ三層に別れけり

柳田皓一

停電にマイク離すや稲光

青空の先も青空赤とんぼ

山元正規

新米や越後は水のうまき国

封印れば匂ひも青き今年米

松本周二

露草の花みずみずし昨夜の雨

黒揚羽二日続きの同じ刻

植村公女

夏帽子振りて別れてそれつきり

ふるさとの訛背に聞く夏の果

ねぶた絵に飛礫の名手なる姫も

今泉如雲

門口にねぶた見送る媼かな

四つ辻で別れて戻るねぶたかな

「一茶名句集」(大正十一年一月廿五日発行)

蓼の葉と握ってゆくや酒の錢

初螢さつとそれたる手風かな

竹の葉につれて葎もわかばかな

若葉して中ぶらりんの曇りかな

卯の花も佛の八日つとめけり

夕がほや男結びの垣に咲く

今朝ほどは芥に一本かきつばた

かさね吟行会

「東高根森林公園」 八月

田中清秀

川崎市の北部、多摩丘陵の東端のこの地は多摩川と平瀬川に囲まれて古くから森林の中に人びとが生活する里山的な環境の場所であった。昭和四十年代の宅地開発で弥生・古墳時代の遺跡として約六十軒の住居跡と食料貯蔵の穴跡や貝塚などが発見された。また、周辺の樹齢二百年近いシラカシの林は自然な形で残っており学術的に大變価値の高い植物群であることが判明した。

平成二十九年八月十一日、今回のかさね吟行会はこの貴重な自然環境を残している東高根森林公園を訪れた。南武線の武蔵溝の口駅からバスで十分ほど行くとクヌギやコナラの林に囲まれた森林公園の入口に到着する。当日は折あしく小雨模様で八月としては少し涼しい天候であった。二時間の散策のあと入口付近の再会を約束して、各自思いのままに吟行を開始する。

みそ萩の色際立てり昨夜の雨

さち子

秋霖に濡れ縄文の古代芝

かなかなの鳴きやまぬまで聞きにけり 周二 皓一

照葉樹のシラカシは鎮守の森や傾斜地などに僅かに残っているが、この公園のように自然な形で残されているのは珍しく昭和四十六年に県の天然記念物に指定された。また、古代芝生公園の下には古代の人びとが耕作を営み居住した集落跡は埋め戻され、東高根遺跡として県の史跡に指定されている。他に湿性植物園、古代植物園などがあり、住宅地の真ん中にあるにも拘わらず、春から夏にかけての新緑や草花、秋の紅葉そして冬の野鳥など四季折々の貴重な自然環境が残され、近郷住民に彩りとし季節感を与えている。それにしても今日は蜩の高く美しい声が喧しい。大きな腹に薄い半透明の緑色の翅を持ち樹木の高みのどこからか、カナカナとゆく夏を惜しむが如く鳴き続けている。

地に埋るる住居遺跡や秋の雨

ひぐらしの白樫の森ひとり占め

蜩や句帳に落つる雨聲

正規

清秀

素山

見晴らし台の周辺にはハギやユリ、スミレなど植物の名前を詠み込んだ和歌の碑も飾られていた。山上憶良の「秋の野にさきたる花をおよびおりかく数ふれば七草の花」の歌碑があり、なかなか風情のある趣向である。さらに湿性植物園に進むと、ツリフネソウ、ヤブミヨウガ、ミズヒキなどが咲き揃い、そして樹陰には淡紫色の花をつけたレンゲシヨウマが群生している。遠方まで行かずとも多くの草花がここで十分鑑賞できる。他に古代植物園やユリ園など広い公園には一年を通じて五百種類以上の花々が咲くという。

描かむと釣舟草の揺れにけり

由利

葉表に葉裏に雫秋の雨

陽子

百日の今日のひと日や百日紅

京子

市街化が進んでいる川崎市内にあって貴重な文化遺産と自然環境の素晴らしい公園に別れを告げ、句会は近くのレストランで昼食を兼ねていつものように囑目三句出し四句選で行われた。生憎の小雨のそぼ降る天候ではあったが和気藹々と楽しい吟行会となった。

最後に、この芝生広場に今も埋蔵されている遺跡を想

像しながら古代に思いを馳せる。三世紀ころの日本人は堅穴式の住居に住み狩猟や採集、水稻耕作で生業を立てていた。また、大きな古墳からは立派な副葬品なども出土している。その頃の人びとは何を考えどんな暮らしをしていたのだろうか。科学技術の発達した贅沢な現代社会とは比較できないが、自然の恵みを大切にして自然の移り変わりと環境の変化に寄り添いながら生活していたと思われる。自然を尊重する知恵は優れた文化であり、決して便利な生活ではないが、その心豊かな暮らしぶりから学ぶことがきつと多いのではないか。

■かさね吟行会■

日時 十月十三日（金）

場所 平林寺

集合 東武東上線志木駅改札口十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（六六）

丸山 酔宵子

『ひと昔前の熱い夏』

「熱い！ 兎に角熱い……！」ワイシャツの糊も汗でぐっしょり、見え張って着ているスーツにも汗が染みってくる。真夏のガラガラした太陽が銀座通りを照り付け、その反射熱で、体感40度以上。連日30度以上、35度も超える猛暑日も続き、地球温暖化の影響が年々暑さが厳しくなっているようだ。

ひと昔前、最高気温が35度以上になる日は減多に無く、35度以上の日を表す公式用語は無かった。マスコミが勝手に「酷暑日」と表現し、一般にも浸透したのだ。しかし近年35度以上になる日が増えたことから、気象庁

は2007年4月に正式に気象用語を改正し、「猛暑日」としたのである。因みに、「夏日」は日最高気温25度以上、「真夏日」は30度以上。確かに近年、猛暑日が明らかに多くなっているが、ひと昔前（4、50年前）の夏は間違いなくこんな酷暑続きではなかった。

打ち水、かき氷、風鈴、おしほり、縁台、夕涼み、団扇、扇風機、蚊取り線香、蚊帳、遠花火……こんな言葉を思い出すだけで暑気払いになってくる。家庭でのエアコンなどはもってのほかで、流石にオフィスは冷房がされてはいたが、電車もバスも各線の「冷房化率」がメディアに公表され、5割を超えればいいほうで、たまに冷房車が来ると「やった！」と一人秘かに喜んだものだ。今ではしっかりと定着した「クールビズ」も無く、大多数のサラリーマン達はネクタイをきっちり締め夏服の背広をしっかりと着て出社していた。お洒落な老紳士に

至っては、糊の効いた麻地の上下を着こみ、蝶ネクタイを締めそしてパナマ帽を被り白いメッシュの靴を履いて、ステッキ片手に銀座通りを闊歩。夕刻にもなると、銀座7丁目ゴシック建築の天井高い大伽藍風のライオンビヤホールで、美味しそうにジョッキを傾けていたものだ。

それにしても、今年の猛暑日は7月いっぱいまで終わり、8月に入ると異常気象が続き、各地で豪雨が襲い甚大な被害に見舞われた。関東地区に至っては、21日間も雨が続き、例年の8月とは思えない異常気象であった。広島・長崎の原爆記念日、終戦記念日、お盆、花火大会そして甲子園の高校野球。矢張りわが日本の8月は熱い夏がよく似合う。

地球温暖化で季節はどんどん早送りになっているようだが、あと3年もすると2020年の東京オリンピック

ク。7月24日から8月9日までは、猛暑の中或いは長雨続き・・・？ 東京オリンピックは果たして大丈夫であろうか・・・。

乾杯のジョッキが響く大伽藍

酔宵子

本からのあれこれ(23)

米田 文彦

「江戸川柳1」

若い頃買った本に「江戸川柳辞典(浜田義一郎編)」というのがある。川柳は今でも時事川柳、サラリーマン川柳などと人気の文芸だが、江戸時代に作られて今に残るものは二十万句を超えると書かれている。この分厚い本に紹介されている句の数はいくつぐらいなのかと思ひ、索引のページから計算してみた。最初の「あ」のページには一段に二十六句、五段組みだから百三十句、最後の「わ」までは五十四ページあり、五十五ページ目にもいくらかあるが、だいたい七千句ぐらいの川柳が紹介されている。

今までこれを通読したことがないのは他の辞典と同じで、寝るとき布団の中で拾い読みしたり暇つぶしに開いたりするだけだった。しかし面白いことは面白いので、今回すべてを読んでみた。すると、いくつかのジャンルに区分けできることを発見した。多いのは 日常生活、男と女、吉原、子どもであり、歴史ものといえるものも

多い。ここではそのいくつかを適当に 紹介してみたい。まず不朽の名作から。

寝て居ても団扇のうごく親心

はへば立てたてばあゆめの親心

孝行のしたい時分に親はなし

「うららか」というと俳句では春の季語だが、川柳ではこうなる。

うららかさしきりに銭が欲しくなり

ぼうつと育ったのを甚六という。総領の甚六とか。

甚六は戒名忘れ南無親父

気合を入れて厳しく叱ると姿を消してしまった。そうになると心配になって探しに出ることになる。

甚六を叱りすぎして尋ねに出

碁かたきは憎さにもくしなつかしき

かち将棋いかにいかにとならして居

将棋の形勢がよいと、さあどうだどうだと駒を力強く打ち鳴らしているのだ。

以下、適当に。

福祿寿おじぎの時は跡じさり

(頭の長い神さまだからお辞儀のときは注意)

なまにゑな内になくなる小鍋立

かたつむりどこで死んでも我家なり

暑氣見舞枕とうちわ持て逃げ

(誰か来た。こっちは裸で寝てたのに)

呉服屋で押しのつよいは女なり

かつぱをば生け捕りさて餌にこまり

子ができて川の字なりに寝る夫婦

弘法も一度は筆で恥をかき

(弘法も筆の誤りということは、一度は間違えて

恥をかけた訳だ)

源氏と平家、義経と弁慶のジャンルから。

牛若はどこへ行くにも足駄がけ

武蔵坊とかく支度で手間がとれ

(七つ道具を背負って支度がたいへん)

平家から検死にあきる五条橋

(弁慶は五条橋で千人切り、検死に来るのも飽き

るだろう)

清盛の医者のはだかで脈をとり

(清盛の死は熱病、周りも暑い)

湯に入るとき清盛はぢうといふ

義経は八艘とんでべかこをし

(壇ノ浦の八艘飛び、あかんべえ)

とんだ身の軽い野郎と能登守

(追いかけたのは能登守教経)

壇ノ浦小手すねあての土左衛門

名のるうち馬はしばらく息をつき

(「やあやあ我こそは・・・」と名のっている間が

馬のしばしの休みどき)

遠くから突っついてみる衣川

(義経は奥州に逃れるが衣川の館で敵に囲まれる。

弁慶はたくさん矢を打ち込まれて立往生。立つ

たまま動かなくなつたから生きているのか死ん

でいるのか、怖いから遠くから突っついて確か

めてみる)

今回は男と女、亭主と女房、借金取りとの攻防です。

ある自然科学者の手記(65) 大橋 望彦

〈悦鹿セミナー〉

「何故鹿にこだわって、彫り続けているのですか」という質問を良く受ける。

正直な話、この質問に対して今迄は、鹿が好きですからです、とか、私が午歳ですので相性がいいから、とか言っておチャラカしていた。しかし、彫り出してから彼此10年以上になるので、もう少し真面目に考えても良いであろう。そうして考えている内に、はたと、思い当たることを見出した。其れは、要するに、小生の自信の無さである。最近少しマンネリ化していないか?と、自問自答すると、確かにマンネリである。ループ・タイの形、ネックレスのデザイン、どれをとっても、すべて同じ顔貌であり、奇抜な思考が完全に欠けている。以前は、そ

うではなかった。作ってみて、まあこれならば良いか?と、妙に納得してしまっている。進歩は完全にストップしている。と、言うよりは、容を変える事に、ある種の恐れを感じているのだ、立像の方は、まだマシの感じだが、それでも、殆ど単調になっている。これは、やはり先程の「自信の無さ」に繋がるのかも知れない。即ち、鹿以外の対象を扱って、どの位打ち込めば多少は観られるような作品が創れるようになるのであるのか。正にこれは挑戦としか、言いようが無い。正直言って、もう満八十歳に後一ヶ月少々で達するという歳になってしまった。カッコウよく言えば、人生死ぬまで挑戦であると人は言う。そんな格好は同でも良いのだが、同じ挑戦を続けるとするならば、今、中途半端に「鹿の木彫」から別の作品に切り替える必要性が何処にあるのであろうか。鹿を対象とした彫刻の世界をもっと抜げる事を諦める必要も無いのである。

そこで、「悦鹿セミナー」を飲み会のような形で開き、

肩の凝らない会にしたらばと思った。それには日帰りと言うわけにもいかないので、泊り込みで、寝袋持参、女性には二名位は別室を用意する。食事、飲み物等については、材料程度は「悦鹿」が用意する。例えば、コロツケ・パーティーの形式で、キャベツの刻みのうえに一杯にコロツケを盛り上げ、それにプラス、押し寿司「悦鹿寿司」（小生の調子が好ければ）、もし学生諸君が作るならば、シチュウかカレー・ライスでも作ると好い（材料は悦鹿の提供による）。酒は安いバック酒、焼酎、ワインの大瓶ぐらいは用意するが、他の飲み物が希望ならば、持参が原則。朝食は冷凍庫、冷蔵庫の中を整理する積りで、有るもの次第、適当に作って食べることに。

後は、フリー・トーキング・システムによる、決められたテーマに関して討議する。テーマは、

☆奥多摩の町民は、町外の人に何かを望んでいると思

うか。

☆奥多摩の町民に興味を持ってもらおうとしたならば、どんな事か。

☆奥多摩で、何かコミュニケーションを執るとしたならば、どのような方策を執るとよいと思うか。

☆特に、奥多摩に限定しなくてもよいが、貴方達は何をしたいか。

☆奥多摩のどのような処に独創性を感じるか。

どんなおしゃべりになるか楽しみです。

絹の話 (83)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

「絹のストッキング、靴下」

絹の靴下の歴史

日本では、絹は晴れ着用として他の繊維とは別格に扱われて来て、靴下に使うという発想には馴染まなかった様ですが、昨今絹のストッキングや靴下が蒸れなくさっぱりしてなんとなく気持ちが良いと云うので静かなブームになっています。

絹の靴下が世界の歴史に登場するのは、1547年イギリス国王ヘンリー八世へのスペインからの贈り物の中の一つにあったそうです。

ヨーロッパの絹生産はフランス、イタリアが盛んでありましたが、当時スペインはヨーロッパの最強国で、服飾などの流行の発信地でもあった事を思えばうなずけます。それまでの靴下は革、毛、木綿が使われ、保温を主とした装飾的なものでした。

ところが絹の靴下は薄くて透明感があり艶やかで、軽く伸縮性に富み、足にフィットして履き心地も良く、女

性の脚線美を強調出来ると云うので、スペインからイギリス、フランスへと瞬く間に広がって行ったようです。

ヘンリー八世のあとを継いだイギリスのエリザベス一世は絹の靴下をこよなく愛用したといわれています。20世紀初めになってアメリカで爆発的に流行し一世を風靡しました。それまで日本からの絹の輸出はヨーロッパ中心でしたが、アメリカへの輸出が主流になってゆくのです。

しかし1938年ナイロン生産が工業化されて、細くて太さにもムラがなく、透明感があり、丈夫で安価なナイロン製ストッキングが絹のそれに取って代わりました。現在ではパンテイスティングが中心になっています。

絹のパンテイスティングの復活

絹のストッキングやパンストの泣き所は摩擦に弱く、すぐ穴があいてしまい、高価な割には耐久性に欠ける点が最大の弱点で、逆にナイロンのそれは摩擦に強く伸縮性に富み、価格も安いので、瞬く間に広く一般化し、絹のストッキングなどを駆逐してしまいました。

ところがポリウレタンやナイロンと絹を会わせて1本

の糸にする技術が開発され薄くて透明感があり、摩擦に強く、伸縮性に富み、絹の感触を満喫出来るストッキング等が登場すると静かなブームが起きてきました。

今日のシルクストッキングなどは殆ど化繊を芯にして、芯の周りに絹を巻き付けた糸で編まれたものです。

新しいシルクストッキングの糸の構造

○シルク・シングルカバリーニングヤーン

伸縮性の大きいポリウレタンの糸を芯にしてシルクを巻き付け、表面は全面シルクになる様に作った糸。

○シルク・ダブルカバリーニングヤーン

ポリウレタンの糸を芯にしてナイロンの糸を巻き付け、強度を補強し、もう一層シルクの糸を巻き付けると云う三重糸。

○ハイブリッドシルク

ナイロン等を芯にしてその周りを数本の細い絹糸で芯と同方向に並べて覆い、糸の表面は絹となる様にしたもの。

パンティストッキングの編み方

○ウーリータイプ

主にハイブリッドシルク糸を仮撚り加工し、細かにカールさせて、その糸を何本か合わせ、撚りをかけて編み、精練、熱収縮したもの。

○シャータイプ

カールのない糸を何本か合わせ、甘撚りをかけて編んだもの。絹100%の靴下はこのタイプが多いが、価格も高く、生産量もあまり多くありませんが少ない。履き心地が良いので 根強いよい人気があります。

○ケンネルタイプ

ウーリー、シャータイプの中間の糸で編んだもの。

○サポートタイプ

伸縮性の大きいポリウレタンの繊維の回りに絹やナイロンでカバリーニングした糸で編み、編立後に精練したもの。

パンティストッキングの流行

世界中、中性から現代にかけて女性の衣料は重装から軽装になって来て、足を露出して曲線美を表現する様になり、パンティストッキングの需要は益々増加しています。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

七十三回

「月虹」 鯨島 満

二十 扇畑忠雄 4

茂吉生れし国と思ふに翁草咲き乱れたる土にしたいし
む 昭和五十年

大石田次^{じねご}年子に採りてたまひたる翁草一鉢吾をなぐ
さむ 昭和五十五年

翁草につぎて賜ひし白テッセンなよなよと花久しか
りけり 同

翁草すでに呆けてしづかなり茂吉ゆかりの庭にわが
立つ 昭和五十六年

茂吉が幼い頃から親しんだ翁草が詠まれている。

一首目は茂吉が次^{じねご}年子で採った翁草をもらい鉢植えにしたのが慰めになるというのである。「大石田次年子」は茂吉の住んだ聴禽書屋からはかなり遠い山あいの集落である。茂吉は『白き山』の中に「次年子」と題する五首を詠んでいる。その中には「茂山の葉山の中腹とおもほゆる高き部落を次^{じねご}年子とぞいふ」「自動車のはじめて通るよろこびをこの部落びと声にあがたり」「高はらの

村の人々酒もりす凱旋したる時のごとくに」などがあり、当時大石田の中心地から隔たったところだったことがわかる。

四首目は茂吉の生家の庭での作であろう。

茂吉は翁草を多く詠んでいるが、最も早い時期の一首「おきなぐさに唇ふれて帰りしがあはれあはれいま思ひ出でつも」（『赤光』大正元年）の自釈の中で、

『おきなぐさ』は即ち白頭翁で、表面に白き纖毛密生し、内面黒きまで深紅の花である。花が過ぎると僧が持つ拂子に似た形態になるのを、作者はひどく愛して居る。この草は耕作地など、日光の当るところの方に多く生える。（中略）少年時のことが過去の追憶となつてこの一首を作らしめた。

（『作歌四十年』）

と思ひ入れたつぷりに述べている。そういう花であるから、「死にたまふ母」の葬送の場面でも「おきなぐさ口あかく咲く野の道に光ながれて我ら行きつも」と歌い込むことを忘れなかった。晩年近くにも「おきなぐさ」に残りてにはへるを一人掘りつつ涙ぐむなり（『白き山』昭和二十二年）と詠んだ。

石を踏み雪越えてゆく谷の上ややに近づく茂吉の歌碑に 昭和五十五年

あくがれて久しかりける茂吉の碑風ひびく中にわが

手触れたり

詠まれた情景からみて「歌碑」は蔵王山熊野岳山頂に「陸奥をふたわけさまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中になつ」(『白桃』)を刻むものであろう。二首目からは、この歌碑が建てられた昭和九年以来初めての登頂であったことがわかる。

蓮華寺に茂吉の歌碑をたづね来ぬオクラの咲ける畑も過ぎつつ

昭和五十六年

滋賀県米原の蓮華寺に、山形県金瓶の宝泉寺で幼年時代から世話になり感化を受けた佐原隆応和尚との縁で立てられた茂吉の歌碑を訪ねたのである。歌碑には「松風のおと聴く時にいにしへの聖のごとく我は寂しむ」(『たかはら』)が刻まれている。

大石田の茂吉伝ふる君の稿促して月々待ちにしものを

昭和五十七年

この一首が詠まれた昭和五十七年は、大石田の茂吉の身辺の世話をした板垣家子夫の亡くなった年である。板垣は、作者が主宰する「群山」に大石田における茂吉のことを連載していたのである。板垣の死は作者にとって

も茂吉を読む人にも惜しいことであつた。

新聞記者君の仮り家に赤彦も茂吉百穂もよぎり宿りき

昭和五十七年

「君」は作者の同郷の先輩で若い日の師であつた中村憲吉のことである。憲吉は大阪毎日新聞経済部記者であつたころ広島県尾道に仮住まいしていて、アララギの仲間の訪問を受けていた。

壮なる茂吉に会ひて学びしを思ひ出として老いゆかむとす

昭和五十年

鰻このむことも真似びて年ありき古き街に来て古き店に食ふ
上ノ山に好みて鰻食ひし店継ぐ人なしに鎖さむといふ
昭和五十五年
昭和六十一年

作者は二十三歳のころ、五十三歳の茂吉に会つて以来、その後長く教えを受けている。この出会いを幸運として茂吉没後も生きているというのが一首目である。

学ぶとは「まねぶ」こととばかりに茂吉の鰻好きまで真似て茂吉ゆかりの店で鰻を食べたというのが二首目である。

楽しい時間 59

山本紀久雄

2017年8月31日

遊牧の民モンゴル・・・その一

今号は三遊亭円朝を休み、8月上旬、モンゴル遊牧民と過ごした生活について述べたい。

モンゴル人は遊牧の民で「土地に縛られない」身軽な生活である。モンゴルの乾燥し、寒冷な環境に適した生活技法として遊牧が展開され、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダの5種類の家畜を群れとして放牧し、宿営地にゲル・円形のフェルト製テント式住居を置く。

草原の夏は短く、8月に秋風が吹き始めたと思うと、すぐに初雪がちらつき、移動して冬営地へ行くように計画的に季節移動を繰り返している。冬営地はモンゴル高原特有の北西の季節風を避けるために山陰につくられる。

遊牧は年間500ミリ以下という苛酷な自然条件のもとで、人間が



生きていくためにあみだされたきわめて合理的な形である
モンゴル国土の西側に標高4300mのアルタイ山脈と標高3500mのハンガイ山脈がそびえ、東側には標高1000、1500mの高原が広がり、北東には針葉樹林が展開して、残りの国土は高山砂漠とステップの植生が、南の海拔1000mのゴビ砂漠まで続き、国土の5分の4を占める草原ステップは牧草地に使用されている。

重要な河川はバイカル湖に注ぐセレンゲ川とアムール川を経てオホーツク海（太平洋）にそそぐヘルレン川がある。

モンゴルの人口は約310万人で、首都ウランバートルに50%、地方の県庁役所や郵便局等に勤務しながら遊牧生活する国民が30%、完全な遊牧生活している国民は20%である。

今回体験した完全な遊牧生活の「夏の草原の一日」は、夜明け前のウシの乳しぼりからはじまる。ヤギやヒツジは昼間に搾乳し、ウマの搾乳シーズンはじまれば、一日に何度もその乳をしぼり、馬乳酒をつくることになる。

朝、ウシの乳しぼりから



戻った女性たちは、乳茶をつくりはじめる。ゲルの中央に据えられたストーブで、大きな鍋に湯を沸かして、茶葉を入れてよく煮だしたあと、塩と乳をくわえて味をととのえる。

煮だし方としては、ひしゃくをやや高くもちあげるようにして乳をまぜる仕草が独特で、茶葉は、煉瓦状に固められた磚茶（せん茶・茶の葉を蒸して固めたもの）をナイフで削り、さらに臼と杵で碎いておいたものを用いる。

塩味のするミルクティーができ上がると、まず鍋からひしゃくでやかんに入れ、次にやかんから魔法瓶に移すが、まだ鍋に残った乳茶を二日の最初の食とする。

でき上がったばかりの乳茶には、自家製の乳製品をひたして食べる人が多い。朝のティータイムは、起きた人から順に、あるいは作業の合間に、各自バラバラに進行する。家族がいつせいに食卓につくことはまずない。また、「いただきます」と声をかけあうこともない。

寡黙な時間が流れる中で、あくまで淡々と、各人がめいめい自分の欲するだけのお茶を飲み、それぞれ欲するだけの乳製品をつまむ。

正午を過ぎて空腹を感じても、昼食の時間はもうけられない。ゲルの中に入りするたびに、各自が自主的な判断で、朝からテーブルに置かれたままになっている乳製品をつまみながらお茶を飲むことになる。

客が訪ねてきた場合、乳茶と乳製品を出す、馬乳酒があればお茶の代わりに出す。馬乳酒とは、ウマの乳をどぶろく状に発行させた酒。アルコール度は2パーセント程度。これを腹いっ

ぱい飲むのが、夏の草原での楽しみとなっている。

やがて、いよいよ夕食。夕食は一日の仕事をはば終えてから食べるので、たいいてい夜の10時を過ぎる。夜食というべきかもしれない。ただし、夏は夜9時でも空はほのかな明るさがのこっている。

夕食の献立は、自家製のヒツジ肉うどんなど、小麦粉を使つた汁ものが多い。ヒツジの肉を細切れにして鍋に入れ茹で、そこに自家製の切り麵を入れる。

味はたいいてい塩のみ。最後にタマネギのみじん切りをくわえて出来上がり、椀に山盛りにしていれる。椀に少なくいれるのは縁起が悪いということで、ゆたかさと呼び起こそうとする意識があるらしい。遅い夕食は、一家団欒の憩いの場ともなる。食後にまた乳茶をしこたま飲む。

こうして一日の最後にたつぷりと食べて、眠りにつく。夜に十分食べないと寝付けないという。以上のような食生活が一年中続く。生粋の遊牧民は野菜をあまりとらない。植物繊維の代替はヒツジの肉であつて、胆のう以外のすべてを完璧に食として利用するが、ヒツジは自ら解体する。

季節的には、夏は乳製品の「白い食べ物」が主力、冬は肉「赤い食べ物」が主となり、家畜を殺すことに対応する。モンゴル語では「殺す」と直截的に表現しない。「トゥフルフ」「バザーハ」（準備する）、または「ザラハ」（使う）といった言葉になる。ヒツジの屠り方は「腹割き方法」で、モンゴル語で「オルルフ」という。モンゴル帝国時代から伝わっている方法で、血を流さなく、地面を穢さない。次月に続く。

漢詩研修 (十二)

千代田岳精会 平井茂行

胡隱君を尋ぬ

高

啓

水も渡り復水も渡り

花も看還花も看

春風江上の路

覓えず君が家に到

渡水復渡水

看花還看花

春風江上路

不覺到君家

【作者】 高啓（一三三六～一三七四）明初の詩人、字は季迪、号は青邱子で知られる。長州（江蘇省呉県）の人。楊基・張羽・徐賁とともに呉中の四傑、または明初の四傑と称せられる。博学で詩に巧みであり、歴史に精通していた。元末の戦乱のとき、群雄のひとりである張士誠が都を蘇州に置くと、その重臣である饒介に詩才を認められて、その知遇を受けた。のち至正十八年（一三五八）二十三歳のときに蘇州近郊の青邱に住み、青邱子歌（森鷗外に訳がある）を作った。号の青邱子は地名からとったのである。

【語釈】

* 胡隱君…胡は姓。隱君は仕官しないで隱棲している人。経歴はわからない。 * 水…川の意。蘇州のあたりは川や堀が縦横に流れる水郷地帯である。 * 江上…川のほとり。川のことを南方では江という。

【鑑賞】 前半は対句であるが、同じ表現を二度くり返して古風なおもむきの味をねらう。後半は春風のそよ吹く中をブラブラと行く情趣をうたっている。いかにも江南の水郷の春の気分をよくつかんだ詩である。相手は隱者であるから、おのずから隱者をたずねるにふさわしいたずね方がある。約束をして会うようなたずね方ではない。春風の吹くままに、花のさそうままに、足が自然にそちらのほうに向く、というたずね方。そこに深い味わいがかもし出される。絶句としては変則で、古詩の風を帯びているというべきだろう。唐詩以上に唐詩の風がある、とされる作である。

植物の力(2)

夏目勝弘

植物は動けないために、外形的には刺とか匂ひ・味等々を、そして毒を持つそれは種の生き残りのために、それぞれの植物種の内の精密な化学工場で30億年という長い時間をかけ進化してきたものである。

我々が雑草として除草剤によつて枯してしまう、タンポポなどは健胃薬・利尿・解熱・発汗・強壯などの薬として利用してきた。また人の心に安らぎを与えてくれる。たとえば長塚節の短歌

に
○鬼怒川の冬のつみに蒲公英の霜にさやらひくきたたず咲く
ユキノシタは、葉をあぶつて腫物・火傷・凍傷などにはりつける。また葉を塩でもんでウルシかぶれに効くという。成分は無機物で硝酸カリウムと塩化カリウム。

化学工場のない草のなかでどのようにして作られるのだろう。斎藤茂吉の目で捉えると(わが家の石垣に生ふる虎耳草その葉かげより、蚊は出でにけり)茂吉も生葉を使つただろうか。現在では医師の9割が漢方を使つていふというデータがあると言われている。

冬の遅くまで、藪かげに赤い丸味のある実が枯れ色のなかで、アクセントをなしている。

カラスウリは漢方では、利尿・浄血薬・黄疸・下血などに使い、催乳の効もあるといわれている。

冬枯れとなり、色が少なくなった藪等に一点一点と赤色が見えたと、なんとなくホットするものである。歌人。半田良平は、

○露霜に色づくみれば烏瓜市中のこの藪にありしか

土屋文明の一首に(石の間にはびこる青き冬草の見るに皆外国渡来の薺)薬効は利尿・解熱薬としている。また止血剤にもなるといわれている。文明の歌にある。外来種のナズナに同じ薬効があるかどうかはわからない。

クズは、万葉集より各時代の歌人が多くの短歌にしている素材である。

○葛の葉ののびあまりたる太蔓のながし蔓をふみこえに
けり(吉植庄亮)

この首のように茂りに茂り、他の草木を枯してしまうほどの強さを持っている。そのためか、根はデンプン、葛根湯を始めとし乾性皮膚病・小児はしか・神経痛・結膜炎・大腸カタル・じん麻疹等きわめて応用範囲がひろい。根から得たデンプンを、クズデンプンと呼び滋養剤とするほか、錠剤賦形薬にもなる。

(以上の薬効などは、原色日本薬用植物図鑑・保育社)より
薬効以外にも植物には不思議な力を持っている。その二つに、春に咲くスミレは四百種におよぶ。

スミレの花に、紫・黄・白色があることについては、鳥や虫による虫媒花ではなく、自花受粉をする。

開花する花には結実せず、確実な閉鎖花で子孫を残す。開花しないままで種子をつくることから植物界の処女懐胎と言いたくなるが、実は閉鎖花であつても、おしべとめしべが備わっている両生具有の受粉である。

(スミレについては、主張する植物・塚本正司)による。

植物より受けている恵みの多くのなかの数点である。無限の恩恵を受けている草々を、自分の都合で雑草としてしか認めていないことを知った。

「水魚」のことから(201) 岡本八千代

「水魚」の稿、201回を書こうとする私、なんとなく、いままでにはない緊張感が漂ってくるような気がする。どこまで書けるかしら？

また、今日は第99回全国高校野球選手権大会の決勝戦。テレビを観るともなく観てしまう。花咲徳栄(埼玉)と広陵(広島)決勝戦である。結果は、花咲徳栄が勝った。

少年たちの雄々しさ、汗水に光る日に焼けた顔、顔、いや、応援団の男子・女子高生らの熱血感溢れる姿・姿に感動した私。

さて、その心そのまま、漱石の「木屑録」を読んだ子規の評論について書く。(高島俊男著「房総紀行「木屑録」を参考」

(余知吾兄長于英文也久、

而見吾兄漢文則始于此木屑録也。

余興吾兄入校也、

共学缺舌草蟹文、

而吾兄嶄然現頭角、

話蟹語猶邦語然。

余以爲長于西者概短于東、

吾兄亦當不知和漢之学矣。

而及見此詩文則知吾兄天稟之才矣。

其能詩文者則其才之用耳。

不必問文字之自他興學問之東西也。

如吾兄者千萬年一人焉耳。)

「きみの英語がよくできるのは前から知っていた。きみの漢文を見たのはこの木屑録が初めてだ。(これはうそ。七草集の評をみている)。ぼくときみとは学校にはいつて共にピーチクパーチクを習い横文字を書いた。きみは断然頭角を表わし、洋語をしやべること国語の如くであった。ぼくは、西に強いものは東に弱い、きみも当然和漢の学はだめだろうと思っていた。この詩文を見てきみの天与の才を知った。詩文の能力は才の働きである。文学の自他、学問の東西にはかわらない。きみのことは千万年に一人である。」

子規は漱石のことを「君のごときは千万年に一人である」と木屑録の評の中でほめていた。

私も、女学生の頃、漱石の本を読んで「神様みたいな人と思っていたが、今、いろいろなことを知って、漱石も人間なのだ、そしてユーモアの持ち主でもあるのだと思って、親しみさえ感じるようになったみたいだ。

今夜(8月23日)の中目新聞の夕刊に、阿刀田高「この道」の部処、「夏目漱石①」でこう書いてあった。

「日本の近代文学の揺籃期に卓越した道を拓いた文人であり、思想は深かったが、小説については、下手だった。文章は滅法巧みであつたけれど、である。

・漱石の頃の日本は、古くからの文学のよい伝統を(中国の影響もあり)保存していたが、今は小説のようなジャンルにも時代とともに進歩があるのだ。」

と。人それぞれの見方、考え方があんなあ。

「歴代天皇御製歌」（八十一）

貫名海屋資料館

「孝明天皇」第二百一十一代・在位一八四六年（十六歳）——一八六六年（三十六歳）

孝明天皇は、仁孝天皇の第四皇子。幕末の急運を告げる内外諸情勢に際し、「澄まし得ぬ水にわが身は沈むともしはせじなよろづ国民」と賢明な措置を打たれ、維新の大業を完成された。

孝明天皇の第二皇子、後の明治天皇は、幼少より、孝明天皇から、和歌創作の手ほどき、添削を受けられながら、皇室の「しきしまのみち」は伝承されたのでした。

天のはらふりさけ見れば朝日影かすむも飽かぬ春のいろかも

無瀬宮御法楽（二十三歳） 米使ペルリ浦賀に来航

朝な夕な民のかまどのにぎはひをなびく煙におもひこそやれ 当座御会

ことの葉のたむけうけてよ國民のゆたけきことを神もおもはゞ

神宮御法楽（二十四歳） 幕府、米・英・露などと和親条約締結

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこゝろにかゝる異國の船 六角博通所蔵業書

國民のやすけきことをけふこゝにむかひて祈る神の御前に

異船ことふねの治ることをさらにいまふかくも頼む鴨の御社みやしろ

いつとなく心づくしに作つくなす民のなりはひおもひこそやれ

野菜物の生きたるをみて

武士もこゝろあはして秋津すの國はうごかずともにをさめむ

詠寄國祝(二十五歳)

おろかなるわが身も共に人並みにまじるはづかし敷島のみち

述懐 当座御会(二十六歳)

わが命いのちあらむ限かぎりはいのらめや遂には神のしるしをもみん

石清水御法楽(二十九歳)

ねがはくは朝なくの言の葉をあはれみうけよ神ならば神

内侍所御法楽

日日ひひひひの書ふみにつけても國民のやすき文字こそ見まくほしけれ

春日社御法楽

長くともかぎりはありぬ梅の雨さりとて晴れよ異国ことくにのうさ

さまぐになきみわらひみかたりあふも國を思ひつ民おもふため

春日社御法楽

願くはこゝろ静しずかに山のはの花みてくらす春としもがな

内侍所御法楽(三十五歳)

編集室だより【二〇一七年八月】

○十月の吟行予定の下見に出かける。

「金鳳山平林禪寺」南北朝時代の創建以来650余年にわたり禪の法灯を伝える関東の名刹。本山は、京都「正法山妙心寺」。「平常心是道」。知り得たい禪の神髄に近づいてみましょう。

○八月の俳句吟行は、溝ノ口駅からバス15分。「東高根森林公園」へ。

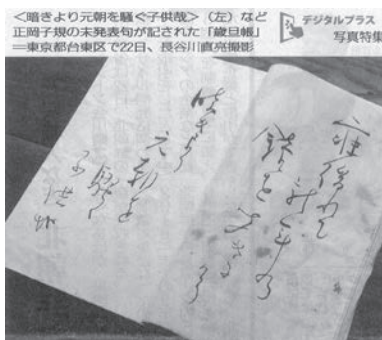
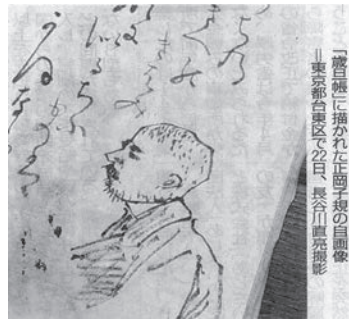
多摩丘陵一帯に広がっていた照葉樹のシラカシの天然記念物の森林を感じ、古代芝生広場「東高根遺跡」。弥生時代から古墳時代にかけての大きな集落がすっぽり埋まっている、その上を歩くときの複雑な気持ちを味わい：：なんともありがたい公園での吟行は、身心に染みた。

○鞠子姉が亡くなってしまった。存在が皆を安心させてくれる人だった。姉の妹として、しっかりしていなくては！と思う。

○「正岡子規最晩年、未発表5句発見」

「歳旦帳」1901年＝明治卅四年一月一日＝子規が没する前年の正月年賀の客の俳句や絵などを墨でつづったもの。」

寝後れて新年の鐘を聞きにけり
暗きより元朝を騒ぐ子供哉
うらくと初日の影や枯木立
初夢や巨燵ふとんの暖まり
留守の戸に名刺投込む御慶かな



毎日新聞より

○99年ぶり、北米大陸を西海岸の（オレゴン州）から東海岸の（ジョージア州）まで横断する形で「皆既日食」が観測された。

NYにいる由野が、サウスキャロライナまで日食を追いかけて、私のスマートフォンに、刻々と報告映像が送られてくる。臨場感満点、太陽と月と地球と人間と。

野菜の花（16）

鈴木 孝 雄



○ エゴマ

エゴマに興味を持ったのは、韓国でサムギョプサル（三枚肉）の焼肉を包んで食べる時にエゴマの葉がよく出る事からだ。シソに似た独特の香りが最初は気になったが、慣れると焼肉に良く合う。しかも栄養満点とのこと。

5年ほど前、自分でも栽培してみようと、5月に種まきした。7月には葉が茂り、焼肉では食べ切れないほど育った。8月、シソよりちょっと大きめの総状花序の花穂が出来、5mm程の白い花をいっぱい付ける。自然交配のほか、写真のように蜂等が訪れ交配を助ける。

10月には葉が黄変する。抜き取って廃棄するのは勿体ないので、切り取った株を2週間風乾し、幹を叩いて実を落とし、篩で丁寧にゴミなどを除き、水で洗い、天日干ししてエゴマの種を得た。種はゴマより小さく、実に根気の要る作業だった。乾燥した実を軽く炙ってすり鉢で擦った時の芳香と野菜の胡麻和えを食べた時の感激は、骨の折れた作業の苦労を忘れさせてくれた。

近年エゴマが大変注目されている。エゴマの実を圧搾して得るエゴマ油は他の食用油に比べて、 α -リノレン酸含有が圧倒的に高いためである。 α -リノレン酸は動物体内でEPAやDHAに変換される。さらに、癌・動脈硬化・認知症予防にも効果があることが分かってきた。まさに現代人にとって救いの食材である。

エゴマは東南アジア原産であるが、縄文遺跡から種子が発見されるように、我が国でも古くから重用されてきた。温故知新の好例であろう。栽培は容易。兄弟品種のシソとの交雑には注意。

今回はチャイブの花の予定です。

お知らせ

△十一月号の原稿は、九月二十九日（金）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アラギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アラギ」について

◇三河アラギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。
振替口座〇〇八三〇一六一五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アラギ発行所・〒一一四一〇〇二二
東京都北区王子本町一―二六―六A
TEL・（〇三）五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美